

## 第3学年3組 道徳科学習指導案

### 1 主題名 人類愛、つながる命 中学校（C-18） 国際理解、国際貢献

#### 2 主題設定の理由

○ 本学級の生徒は、9年間ほとんど同じメンバーで過ごしており、班の友達やクラスの友達へ思いやりの心を持っている生徒が多い。また、生徒会活動が活発に行われており、自分たちで決めたルールなどを守ろうとする生徒が多い。しかし、それは学校内といった限られた範囲内だけであり、学校外となるとその意識が急激に低下してしまう。また、自校のためには行動できるが、他の学校や地域のために積極的に行動できていない。これは、今までかなり限られた閉鎖的な社会でしか生活しておらず、その外側に目を向けることが無かったことが原因であると考えられる。そこで、公民の学習やG20が開催され、世界に向けての関心が高まりつつあるこの時期に本主題を設定する。そして、自らの命や家族の命を危険にさらしながら、また日本政府の訓令を無視し、自分の仕事やこれからの生活を犠牲にしながらも、ナチスに追われるユダヤ人を救うことを決断した杉原千畝氏に出会わせ、人類全体の幸せに貢献しようとする意欲を高めたい。このことは、これからのグローバル社会において、どの国の人であっても同じ人間として尊重し、世界の平和と人類の発展を実現していく上で、大変意義深い。

○ 「人類愛」とは、個人の幸福よりも人類全体の幸福を考えることである。幸福とは、欲求が満たされ、心身共に不安を感じず、安心している状態である。戦乱の中では、同じ人間同士が傷つけあい、心も体も傷つき、安心できる状態であるとはいえない。ゆえに、幸福とは平和の上に成り立っているものである。ただし、グローバル化している現代において、自国のみでの平和は成立しない。だからこそ、自国のみでの幸福ではなく、人類全体の幸福を考えるべきである。しかし、世界に目を向けると、現在もなお戦乱が多く起きている。その中で、自国は戦乱がないから関係ないと考えのではなく、人類全体の幸福に貢献したいという意欲を高めたい。

○ 本資料は、元リトアニア領事代理の杉原千畝氏の妻である幸子氏の手記を元にしたものである。ナチスから追われ、わずかに残った可能性にかけて、日本領事館に集まったユダヤ人と、日独伊三国同盟の締結に向けてドイツに反発しにくい、アメリカとの戦争も避けたい日本政府、その狭間に挟まれた杉原一家。これらのことが書かれているものである。

本主題の指導に当たっては、杉原氏の狭間での苦悩に焦点をあて、その中でビザを書くという決断を下した理由をとらえさせる。その中で、杉原氏の決断の理由である「国境を越えた人類愛」を明らかにしていき、その思いを感じさせる。

そのためにまず、つかむ段階では、人類愛に方向付けていくために、クラスに事前に行っているアンケートの結果を提示する。次に、さぐる段階では、多面的・多角的にとらえさせるために、発行する場合と発行しない場合での影響をそれぞれの立場に分けて考えさせる。日本領事館に集まったユダヤ人については、発行すれば命が助かり、日本へと逃げるができる。だが、発行しなければ、ナチスドイツに捕まり、収容所に連行されることをつかませる。また、日本政府については、発行すれば、世界における日本の外交という立場からはドイツへの敵対行為は避けるべきであり、発行しないと判断したことをつかませる。また、家族はビザを発行することで、身の安全が脅かされ、仕事も失い、罰も受ける可能性があることをつかませる。さらに、深める段階においては、杉原氏の葛藤を考えさせるために、エビデンスハンバーガーの枠組みを提示する。最後に、生かす段階では、自分自身に振り替えさせるために、授業前の考えと比較させる。

#### 3 目標

- ・杉原千畝が置かれた状況を社会の時間で学んだことと繋げながら把握することができる。(知識・理解)
- ・国際的視野に立ち、自分や日本社会の幸福だけではなく、広く人類の幸福に貢献することが大切であるということを考えることができる。(思考・判断・表現)
- ・違いを受け入れ、差別や偏見をもたずに人類全体の幸福に貢献しようとするすることができる。(学びに向かう人間性)

本時 令和元年 7月5日(金) 第5校時 3-3において

(1) 主題名 人類愛 つながる命 C-18 国際理解・国際貢献

(2) 資料名 「命のトランジットビザ」(あすを生きる3 日文)

(3) 本時のねらい

国際的視野に立ち、自分や日本社会の幸福だけではなく、人類の幸福に貢献することが大切であるということを理解し、それに向けて生きようとする態度を育てる。

(4) 展開

段階	学習活動・内容	おもな発問	具体的な支援	配時	形態
つかむ	<p>1. 本時の学習の方向性をつかむ。</p> <p>(1) 自分にとって大切と思っているものを確認する。 【お金・家族・夢・世界平和】</p> <p>(2) めあてを設定する。</p>	<p>○なぜそれを優先したのだろうか？</p>	<p>・優先したものは何か想起させるために、事前に実施したアンケートを提示する。</p>	5分	一斉
<p><b>めあて 杉原千畝の生き様を学び、自分の考えを見つめ直そう。</b></p>					
さぐる	<p>2. 資料を読み、発行する場合と発行しない場合で、それぞれの立場の人にどんな影響が出るのか考える。</p> <p>【ユダヤ人】 する→命が助かる、日本に逃げられる しない→捕まり、収容所に送られる</p> <p>【日本政府(松岡洋右)】 する→ドイツとの関係が悪くなる 三国同盟が締結できない しない→三国同盟を締結できる</p> <p>【家族(杉原千畝)】 する→身の危険がある 仕事を失う 罰を受ける しない→安全 ユダヤ人から批判される</p>	<p>○ビザを発行する場合と発行しない場合は、それぞれの立場の人にどんな影響が出るのだろうか？</p>	<p>・それぞれの立場で効率よく考えさせるために、班ごとに考える立場を変える。</p>	15分	小集団／一斉
深める	<p>3. 杉原氏の葛藤を考える。</p> <p>(1) 杉原氏の立場になり考える。 ・発行した →ユダヤ人の命優先 ・発行しない →家族、仕事優先</p> <p>(2) 杉原千畝がビザを発行するという決断を下したのはなぜか考える。 ・自分の仕事や家族の安全と六千人のユダヤ人の命を比べると、自分達の幸福だけではなく、世界全体の幸福のほうが価値があると考えたから。</p>	<p>○自分が杉原氏と同じ立場だったら、ビザを発行しますか？しませんか？</p> <p>●望ましくない状況の中で、杉原千畝がビザを発行するという決断を下したのはなぜだろう？</p>	<p>・杉原氏の立場で考えさせるために、発行する場合としない場合の影響をまとめる。</p> <p>・杉原氏の決断を多面的・多角的に考察させるために、エビデンスハンバーガーの枠組みを提示する。</p>	15分 10分	個／一斉
生かす	<p>4. 自分自身を振り返る</p> <p>・自分自身や家族の幸福だけを考えるのではなく、世界全体への幸福へと広がっていくことが大切である。</p>	<p>○アンケートでは低かったが、世界平和についてあなたの考えはどう変わりましたか？</p>	<p>・自分の考えの変化を考えさせるために、授業前の考えと比較するように指示を出す。</p>	5分	一斉／個

ある朝、突然外国で、自分の家の前の門に群がった百を上回る人々の姿を見つけたとしたら、どう対応すれば良いのだろうか。それがその日、日本政府の外交官である杉原千畝が目当たりさせられた光景である。一九四〇年七月二十七日、日本より八千キロ離れた欧州の小国リトアニアという国の、当時の首都であるカウナスでの出来事である。一九四〇年といえば、日本は日中戦争の真っただ中であり、日本は ABCD 包囲網に苦しみ、ドイツやイタリアとの協力関係を構築するために、欧州の情報を得ようとしていた時だった。そこで、杉原はリトアニアへと送られたのだった。リトアニアは、バルト三国に位置しており、ソ連の侵攻により、併合されてしまった。リトアニアの各国の領事館は撤退の準備を進めており、ほとんどの国が撤退を完了させていた。杉原達も日本政府からドイツへと移動するようにと退去命令が出されていた。杉原達は退去の準備を進めていたときの朝の突然の出来事だったのだ。

杉原のいるリトアニアの領事館は一応ではあるが、鉄柵で囲われていた。だが、それも大人であれば簡単に乗り越えられる高さではない。事実、領事館の周囲に集まっている群衆の中から、その先端へと手をのばし、中へ入り込もうとする姿が見られた。その都度、杉原の使用人達がこれを阻んだが、むしろ多くは、群衆の仲間止められて思いとどまっていた。群衆は大きな声を上げるわけでもなく、ただ訴えかけるようなまなざしで領事館の中を見続けていた。最初、杉原達は何が起こったのかわからなかった。言語も通じず、何が目的なのかもわからなかった。そこで、様々な言語で話しかけたところ、ロシア語が通じる人が群衆の中に何人かいた。どうやら、彼らはポーランドを脱出したユダヤ人で、日本への渡航ビザを求めているらしい。渡航ビザとは、日本に外国人が入ってよいという許可証である。使用人の一人がどうにかそれだけ聞き出してきた。とにかく話を聞かなければと、千畝は代表者五人に入館を許した。

「いったい何が望みなのですか？」

「私たちユダヤ人には、もうこのヨーロッパ大陸には安らげる場所がありません。ナチスはおぞましきニュルンベルク法と共に、いまや欧州全土を支配しています。ポーランドは滅亡し、フランスも降伏、イギリスへの空爆も始まりました。海路では逃げられません。ですから、ソ連のシベリアを渡って、日本へ逃れることだけが、我々に唯一残された希望なのです。」

五年前に可決されたこのニュルンベルク法とは、ユダヤ人の市民権を法的に否定するものである。いわば、同じ人間を奴隷や家畜のように扱うという内容だ。そのドイツを相手に三国同盟を成立させようとしている外務大臣の松岡洋右も、この法については怒っていた。

「しかし、そこから先はどうするのですか。日本とドイツは三国同盟を結ぼうと議論を重ねている。その関係を考えれば、日本があなた達ユダヤ人を受け入れるとは思えない。悪くすれば、ドイツへの強制送還という結果になってしまうかもしれません。」

「我々は、そんなことまで考えていられる状況ではないのです。家を捨てて、ただ持てるだけのものを手に逃げださねばならない。そうしなければ明日の命すら危ないのです。そんな気持ちがあるにわかりますか。」

「四、五人分であれば私の権限でどうにかかりますが、これだけの人数になると、私の独断で許すことはできない。少し時間をいただけますか。」

思案の末、千畝がそう告げると、五人は深々と頭を下げた。

北緯五十四度という高緯度に位置するカウナスの夏、夜はひどく短かった。よく眠れず、朝日が差すとともに起きた千畝は、すぐに事態の詳細を日本政府へと送った。そして、日本政府がビザを発行した場合、ソ連が問題なくシベリア通行を許可するのか確認するため、足を運んだ。帰還するとすぐに、妻の幸子が日本政府からの返信が届いていることを教えてくれた。だが、内容は「ノー」であった。ソ連側は、日本政府がビザを発行するなら、誰であっても通行は拒まないという回答があっただけに、落胆は大きかった。さらに、ユダヤ人難民の状況を二度伝えだが、答えは「ノー」だった。日本政府の返答は絶対であり、無視すれば最悪の場合、死刑もあり得る。千畝はどうしたらよいものかと夜も眠れなかった……。

千畝はリビングに戻った。妻と長男とが自分を待っていたかのように立ち上がった。

「なあ、幸子」と千畝は我が子らの母親である彼女の名を呼び、話し始めた。

妻はこの局面を前に、警えるでもなく、むしろ終始「ごやかだった。」

「私は職を失うかもしれないし、君たちの身に危険が及ぶかもしれない。」

「かまいません。なんとかあります。どうぞあの方達を助けてあげてください。」

問うた千畝に幸子が強いまなざしでそう応じると、こちらを見上げていた長男が驚くほどじつかりと首を縦に動かした。すべての迷いが断ち切られた瞬間だった。

執務室に戻ると千畝は万年筆をつかみ、猛然とビザを書き始めた。やがて愛用の筆記具が酷使に耐えかね折れてしまうと、持ち替えたペンをインクに浸すことを繰り返し、それこそ寝食も忘れて、残された時間のすべてをその作業へと費やした。

ついに領事館が閉鎖された後も、国外退去までの仮住まいとなったホテルへと舞台を移し、同じ作業が続けられた。それでも終わりが訪れることなく、ついにリトアニアを離れなければならぬ一家を乗せた列車が発車するホームにまで、ユダヤ人たちは押し寄せてきた。発車ベルが鳴り始めても、差し伸べられる手は途切れなかった。

許してください。私にはもう書けません。ついにそんな言葉が千畝の口から洩れた。汽車が静かに動き出し、ついに最後のビザが彼の手を離れたその時である。ホームから忽然と日本語によるバンザイの唱和が沸き起こってきた。それはいつまでも止まず、千畝たちの列車を見送り続けていたという。その声がとうとう聞こえなくなってしまうのを待って、座席の千畝はようやく両眼を閉じた。車体の揺れに彼は深い眠りに落ちていった。

杉原千畝はハンガリーで終戦を迎え、家族ともどもソ連に抑留された後、二年余りかかって、日本に帰っている。千畝が書いたビザで救われたユダヤ人は六千人にも及んだとされている。しかしながら、彼を待ち受けていたのは依願退職という形での外務省からの追放であった。千畝は何の反論もせず、静かに去っていった。ビザ発給を決意した時から、いつかこの日が来ることを覚悟していたのだらう。そして、この思いは根井三郎や小辻節三に引き継がれていくことになる。

